

Def busta ~Recovery line~

デ フ バ ス タ ～ リ カ バ リ ー ラ イ ン ～

後編

カービート北海道支局
支局長 むらっち2 著

後編・人物紹介

● 輪道 成海 りんどうなるみ（19歳・女）

イメージキャラ・長澤奈緒。

ライムグリーン3眼ライトの Kawasaki KX500 改（通称サードアイ）を駆り、下村のデスペラーズドジャケットを模した、M65 フィールドを着るようになった。

● 下村 貴 しもむら たかし（24歳・男）

イメージキャラ・坂口憲二。TEAM SANTANA のリーダー及び Garage SANTANA の代表。フルカスタムでスカチューンが施された

Kawasaki Z1000Mk2 改を駆る。

● 上場 見 顎 うわばみ がく（25歳・男）

へビ顔の男。残忍な性格。麻薬ジャンキー。デリヘル店を営者していたが、現在は数多の犯罪容疑で逃走中。

● 岩 野 剛 いわの つよし （ 27 歳 ・ 男 ）

Garage SANTANA ～T. P. Special～ という主にトランスポ
ーターのぎ装・販売をしている店を下村か
ら任されているメカニック。

● 進 藤 諒 しんどう りょういち （ 27 歳 ・ 男 ）

TEAM SANTANA のメンバー。職業は北海道警察
の私服警官をしている。

● 坂 本 仁 さかもと ひとし （ 22 歳 ・ 男 ）

TEAM SANTANA のメンバー。ドラッグの坂本と
も呼ばれている。

● 輪 道 源 三 りんどう げんぞう （ 25 歳 ・ 男 ）

元国際的な2輪ラリーストで、現役時代は
“サードアイ”と呼ばれていた。
成海と七菜香の祖父。現在は「ペンション
輪道」を営んでいる。

季節が移り行き、夏から秋へ、そして冬と
なり、白金温泉郷の辺り一面が、白銀のヴェ
ールに包まれる時、それは、北海道のバイク
乗り達が、ガレージに愛車を仕舞い込み、来
季に向け、整備、カスタムに精を出す季節で
もある。
しかしこの年、旧道・白金峠では、冬期間
であるにも関わらず、2ストの甲高いバイク
の排気音が、毎日鳴り響いていた。
冬期間の新道は、朝・晩と2回除雪車が走
り、そこに暮らす町民の生活と、観光に来て
いる、スキーやスノーボード客の、出足を支
えている。
そしてワインディングとなる、グラベルの
旧道は、朝に一回の除雪が入るだけで、冬に
なると、この道路を走る者は、ほぼ皆無とな

つているはずだった。
しかし成海は、まともに、手入れがされて
いない状況の旧道こそが、トレーニングをす
るためには、最高の状態だと捉えたのだ。
大雪で深雪となる日。放射冷却現象で、冷
え込みが厳しくなる日。吹雪でホワイトアウ
トとなる日。暖気でアイスバーン上の雪が解
け、非常に滑りやすい、ウェット・オン・ア
イスとなる日。来る日も、来る日も、成海は
旧道で、**KX500**・通称“サードアイ”を駆り、
自分の技を磨いた。
また、それと同時に、鍛えた技はもう一つ
あった。それは、過去、祖父から習った「松
濤館空手」の蹴り技で、エंडューロブーツ
を履いたまま、毎日、毎日、足場の悪い雪の
中で、繰り返し返し稽古を続けた。
村と出会った、あの大きな白樺の木の下だっ
た。ただ、ただ、ひたすら稽古し続けた。
そして、雪解けとなり、春の息吹を感じら

れる頃には、鋭い体感センサーと、絶妙なバランス感覚をその身に着け、更には、強靱かつしなやかで、鞭のような蹴脚も備わっている。
「そんな今の成海には、一時間が全てを解決する」などという、日和りの弱弱しさは、一切存在しなかった。

「成海や：、もういいんじゃないか？お前：すっかり変わってしまったぞ：」
源三は、~~XXXX~~ウェアに着替えた成海の背中越しに、優しく語りかけた。

「：おじいちゃん：」
以前までは、陽の光を浴びる、向日葵のようになり、明るい笑顔を振り回していた成海だった。が、その面影がすっかりと消えてしまい、今は笑わなくなっていた。

「ごめんね……」
それは悲痛な哀愁で満たされた、悲しみの
表情だった。
「下村くんは、こんな事を望んじやおらん
ぞー今のお前を見たら何と言うは」
詰め寄る源三。しかし成海の表情は変わら
ない。
「成海……もういいんじゃないか？」
少し間をおき、同じ言葉を繰り返した。が
成海は静かに首を横に振った。
「おじいちゃん、あのね……今まで黙ってた
けど、一つ心配な事があるの……」
ゆっくり頷く源三。
「なんじゃ？」
「アイツ……上場見は……」
それは、まるで呪文のようだった。その言
葉を発した瞬間、成海の表情は、見る間に陰
しく変貌した。その様子を見た源三は、思わ
ず息を飲み込んでしまう。
「アイツはさ、絶対近くに居る。指名手配

されたにも関わらず、アタシと下村さんを、
執拗に付け狙ったんだから」
更に成海の表情は険しくなった。そこでよ
うやく、源三も口を開いた。
「そんなまさかほあれだけの事をして、い
まだこの地に潜伏しているなんて！」
その続きを聞く前に、成海は源三の言葉を
遮った。
「アイツは間違いなく、機会を窺っている
こんな事くらいじゃ、簡単には諦めない」
「それにしただって、警察が！」
成海はまた、源三の言葉を遮った。
「アイツは地の底から、アタシに復讐する
機会を“ジツ”と窺ってる。でも好都合。今
度こそ：今度こそ下村さんの仇を打つ」
固く握りしめた自分の拳を見つめる。
「それに、そうしないと、次はナナに危険
が及んじゃう。アイツの3人目の標的は、ナ
ナだったの：だからアタシが：アタシが囨に
ならなきゃ」



成海は唇を固く結び、そこで会話を終わらせた。

「そんな：まさか：」

源三の口から悲痛な思いが漏れた。それから成海は、踵を返し、下村のデスペラードジャケットを模した、M65フィールドジャケットに袖を通す。

「そんな：成海：。人を呪えば、必ず自分も、その報いを受けることになるんだぞ：」

源三は、立ち去ろうとする、成海の背中にそう投げかけた。

ペンション輪道を出て、成海が向かった先は「Garage SANTANA」だった。そこで、SANTANAのメンバーに会う約束をしていた。いや、それは約束というより、面接といった方が、適切な表現であろう。

彼らに協力を仰ぐつもりだった。だがしかし、その面接は、手痛い“しつぺ返し”を喰らう結果となってしまう。

その場で成海を待ち受けていた、SANTANAのメンバーは、メカニックであり、オフロードマニアの岩野を始めとし、Kawasaki 750 駆るドラッグの坂本、HONDA TLM220R・トライアルの進藤だった。

しかもその進藤は、成海に下村の死を伝えた、あの私服警官でもあった。そんな彼等の前に立ち、軽く頭を下げ、挨拶しようとした時、いきなり坂本が、成海に罵声を浴びせか

けた。
「よくもまあ、抜け抜けと、ツラあ出せた
もんだなあおいっ」
怒りの表情で続ける。
「誰のせいで、こんななっぺんのか、分
かってんのかあーああっん」
成海には辛い問いかけだった。それに、次
の言葉もよく分かっていた。
「俺達は、手前えのせいで下村さんを……」
「坂本、もう止めるッスよ」
その言葉を遮ったのは岩野だった。
成海は、今にも泣き出したいくらい、本当
に辛かった。だが、ただだ、溢れ出しそう
になる自分の弱さを“ぐっ”と堪えた。
「くそったれ：今更になっぺ、上場見捕ま
えんのを、俺達に協力しろだあ」それにその
恰好一下村さんの真似までしやがっぺ：気に
入らねえ」
明らかに好戦的な坂本に対し、成海はあえ
て挑発をした。

「だから何だって言うのさ？口じゃ偉そう
 な事を言ってるけど、誰も下村さんの仇を討
 とうとしてないじゃないか」それでも
 SANTANA なのかい」
 「はっはっは」
 一瞬呆れるように、苦笑いをした坂本が、
 成海の正面にゆつくりと歩み寄り、それから
 左の平手打ちを飛ばした。
 交わそうと思えば、いくらでも交わせたが
 成海は甘んじて受けた。それは、叩かれた痛
 みではなかった、心に突き刺さる、悲しみだ
 った。
 「テメエ、ふざけた事ばっかヌカしてんじ
 やねえよ」
 「もう止めるッスよ」
 そこへ岩野が割って入り、成海から坂本を
 遠ざけた。そして進藤が静かに語り出す。
 「成海ちゃん。実はね、僕は今回の“下村
 殺し”のヤマを降ろされたんだ。表向きの理
 由は、私情が絡むからだそうだ。僕は下村に

近すぎるってさ」
「だから何？それで、おめおめと引き下が
ったの？」
坂本に平手打ちを受けたにもかかわらず、
あくまで挑発的な成海の言い方は、あえて皆
から、咎を受けるために発せられる、贖罪に
も似た必死さが漂う。だが進藤は、自分の感
情を抑え、穏やかに答えた。
「まさか。僕の本心は、はらわたが煮えく
り返っている。だからこうして、個人的に動
くことにしたんだ。僕もSANTANAの端くれだか
らね。上場見は絶対に許せない」
成海は“コクリ”と一つ頷き、黙って進藤
の話を聞いた。
「でも協力できるのは、あくまで水面下だ
けだ。それ以上のことは期待しないで欲しい
その辺は察してくれよ」
進藤はゆっくりと一息つき、話を続けた。
「だから、僕がこれから話す事は、全部独
り言だ」

今度は全員が進藤を見つめた。
「上場見は間違いなく、近くに潜んでいる
それは恐らく、僕たち SANTAN : いや、下村に
関係する、僕達全てを的にかけている。事実
あの事件以来、僕を失脚させようとする怪文
書、つまり、有りもしない、公金の横領につ
いて書かれた手紙が届いたり、他のメンバー
だって、バイクに悪戯されたり、夜道で何者
かにツケられたり：身の回りでおかしい事が
頻発するようになった」
凜々しい表情で、黙って聞く成海。
「でも、僕達だって馬鹿じゃない。ある時
犯人のものであると思われる、バイクを一台
押収したんだ。札幌市の街中で、防犯カメラ
に映った不審人物。どうも上場見と、背格好
や特徴が似ていたことから、近くにいた警官
が職質（職務質問）をしようとしたところ、
急に逃げ出したんで、バイクごと引き倒し、
取り押さえにかかった。けどその警官は、上
場見の仲間と思われる人物に、後ろから後頭

部を鈍器で強打され、いまだ意識不明の重体
だ：可哀想に：。で、そのバイクなんだけど
引き倒した際に、どうやら、プラグが“カブ
ッ”てしまったようですね、乗り捨てていった
んだ。」
息を飲むメンバー。
『まさかZ1000MK2？』成海は心の中で、瞬間
的にそう思った。しかし進藤は、それを見透
かしたように、首を横に振る。
「そのバイクはHONDA CRF450R。本来、公道を
走れないレーサーだったんだよ。テンプラナ
ンバーと、ウインカーやライトまで付けてね
当初、盗難車かとも思ったんだけど、どうや
ら、そうじゃないみたいなんだ。まず、全国
に照会をかけたんだけど、この車両：、いや
この車種の盗難届は出ていなかった。もちろ
ん登録番号は全て削り取られていた：。しか
も、全ての部品もだ一全ての部品番号がだぞ
：全く信じられなかったよ。だが、諦めな
いでもっと調べていくと、とんでもない事が

分かった。このCRFは、型が新しいにも関わらず、随分と走り込まれた様子があった事からエンジン調べてみると、オーバーホールされた形跡がみつかった」

「じゃあ、交換部品から追跡できたってこと？」

成海は、堪らず口を挟んでしまった。しかし、またもや首を横に振る進藤。

「いや、ダメだった。そこがコイツのトンでもない事なんだ。メーカーに照会をかけてここ最近で出荷された、オーバーホールパーツの全てを調べたんだが、全部行先がはつきりしていて、上場見に繋がる手掛かりは、全くなかったんだ。登録台数が少ない車種のうえ、飛ぶように売れるパーツじゃないから、直ぐに足がつくと思っただが：」

「つまり、どういう事なの？」

「つまり：あのバイクは完全な幽霊だ。存在していない。戸籍が無い人間と一緒だし、かも上場見とその一味、数人の仲間がいるこ

とも確認されているのに、全く足取りが掴め
ん。つまりだ：その：」
進藤は言葉を詰まらせた。
「一番想定したくない事が起きている：つ
まり：、つまり：、誰か強力なバックがいて
奴等を匿っているとしたか思えないんだ：」
「SANTANAの敵ってことなの？」
訝しげな表情の成海。
「わからん。そんな事が出来るなんて、相
当な大物だろう。しかし、そんな奴にケンカ
を売った覚えはないし、第一、上場見を庇う
理由が、全く分からんのだ」
暫く沈黙の後、何か試案していた成海が、
ある提案をした。
「確かに、アタシも最近、人に見られてい
る感覚がよくあったよ。漏れなくアタシも、
監視されてるって事だよね。それならさ、
コソコソ隠れてないで、今月末にある“BIEI
RALY GREAT DAYS”に参加して、思いっきり目立
ってやろうと思うんだ。もしそれで、奴等か

「何らかのアクションがあれば、足取りが掴めるってモンでしょ？」

進藤は黙ってしまい、容認しかねていた。そして、そこに水を差したのは坂本だった。

「オイ、調子に乗んなブスッ。何が思いつきり目立ってやるだ、誰のせいであろうなってるって思ってた？ 手前えのせいで下村さんはなあ、下村さんは……」

言葉が詰まる。だがそこで、岩野が坂本の肩を軽く叩き、何度も頷いてから。ようやく口を開いた。

「坂本、わかったッスよ。わかったッス。皆で下村さんの仇を討つッスよ。」

岩野は、更に坂本の肩を叩きながら、自分の決意を述べた。

成海は下村の事で、責めを受ける覚悟はしていた。しかし、分かっていたものの、それは心臓を掴み出されてしまったような、苦痛そのものだと感じた。

事実上、SANTANAに協力は得られた。しかし

依然として、孤独であることに変わりはない
とんでもない“しっぺ返し”だった。

『BIEI RALLY GREAT DAYS』は4日間にわたり、様々な林道と公道を駆け巡る、クロスカントリ―ラリーである。初日は天気恵まれ、晴天の気持ち良い朝に幕を開け、地元民も大勢集まるなか、盛大な開会式が行われた。その後オフシヤルが、出場選手達への簡単なブリーフィングを行い、レーススタートとなるのだが、それは、大会事務局から事前周知された『ラリー概要』からなる、文書を、理解した上でのことだ。

『BIEI RALLY GREAT DAYS』概要

BIEI RALLY GREAT DAYSは、一般公道を利用する競技であるため、道路交通法規を遵守すると共に、地域社会に配慮する必要がある。

§ (競技区間)では、一般車両の進入を防
ぐなどの対策が施されているが、リエゾンへ
移動区間)では、一般公道や市街地を走行す
ることもあるため、車検取得など、交通法規
に準じた、厳しいレギュレーションを設ける
重大な交通違反を犯した者は、即失格とする
場合もある。
スタートは、一台ずつが一定の間隔でスタ
ートする、タイムトラリアル形式で競技を行
う。スタートする順番はゼッケン順だが、前
日のゴール時間順、または前日までのリザル
ト順などとする。
§ (競技区間)では、所要タイムが少ない
順に順位が確定される。ただし途中設けられ
た、CP (チェックポイント)を通過できない
場合や、その他レギュレーションに違反した
場合は、コースごとにタイムペナルティーが
課せられ、そのステージごとの総合計と、そ
の日までのスタートからの累計によって、順
位を決定する。

リエゾン（移動区間）に設けられるCP（チ
エックポイント）では、設定タイムより早く
到着した場合にも、ペナルティーが課せられ
る。
事前に走行ルートは発表しない。レッキや
ペースノート作りは禁止とする。その代わり
『コマ図』と呼ばれるルートブックを、当日
に配布し、ラリー用トリップメーターの距離
とコマ図のイラストから、ルートを読み取り
目的地を目指すこと。

以上

と、このような感じである。
今回、成海のサポートに着いたのは、岩野
と坂本の2人であった。進藤は観客に紛れ、
辺りの様子を窺うことにした。そして相も変
わらず、仏頂面の坂本であるものの、バイク
の整備やタイム計測など、黙ってサポート隊
としての仕事をこなしていた。

このラリーに出場してくる、選手のほとん

どは『年に1回のお祭りを楽しみに来ている』そんな雰囲気であるが、ごく一部、本気で上位を狙う連中のなかには、相当な手練れも存在している。

特に、岩野からレース前に紹介された、オフロードの師匠という、左門豊作を彷彿とさせる容姿の“武田達人（たけだたつひと）”なる人物は、相当な経歴の持ち主で、世界中のラリー・レイドに出場する、プレイヤーのラリー・ストであり、パリ・ダカールラリーを始め、ISDE (International Six Days Enduro) や、国内のMFJ CPU ENDUROで、数々の輝かしい成績を納めているのだ。

ラリー開始後は、予想通りの展開となった。KTM400EXCを駆る武田の走りは凄まじく、穏やかな風貌とは打って変わり、攻撃的なライドイングで、他の追従を許さず、SS（競技区間）でのタイムアタックは、常にトップを独走状態となり、次々とレースを消化していった。

SANTANAのメンバーにあっては、あらゆる期待と不安が、複雑に入り混じる事となった。今回のレースであつたが、その実、上場見が絡むような特段変わった事は何も起きなかつたが、しかし、ことレースにおいて、手を抜かない彼等は、大番狂わせを起こそうとしていた。当然ダークホースはSANTANAだ。最終日となる4日目、なんと成海は、その身につけた、祖父譲りのテクニックを駆使し、順位を2位にまで浮上させていた。トップを独走する武田を、完全に射程距離に捉えていたのだ。最後のリエゾンが終わり、ファイナルクロスト称される、Sのタイムアタックでは、トップを走る、この百戦錬磨の手練れ、武田の背中に、自分の息がかかりそうなほどタイム差を詰めていた。

逃げる武田、その後を追うSANTANA。その瞬間、成海は本当に楽しかった。ただ、目の前の強敵を追い詰め、速く走る事に没頭できたのだから。

この時、復讐の旅路の途中にある成海ではあったが、皮肉にも、レースの楽しさや、バイクで走る楽しさを再認識することとなってしまったのだ。

結局、本ラリーは総合点での勝負となる。強敵だった武田を、最終の2区において、遂に抜き去る事ができた成海であったが、当初の目的は違うところにあったので、終始軽視していた、リエゾンでのペナルティーがひびき結果は3位に終わった。

そう、本来の目的が違った。それはSANTANAだけが知る事実。

しかし、武田や他の参加者は、女性ながら、成海のガッツがある、そのライディングに盛大な賛辞を送った。
「岩野、お前、とんでもない新人を連れてきたなあ。遂には追い抜かれちゃった。いや、まいった、まいったあ（大笑）」
武田は、照れ隠しにおどけてみせたが、次の岩野の言葉に、思わず驚愕してしまう。
「武田さん。輪道の名前で、誰かを思い出さないッスか？成海ちゃんは、サードアイ輪道のお孫さんにして、直弟子なんスよ」
それを聞き、驚きの表情で凍りつく武田。
「なんだって？まさか：そんな：サードアイ：」
武田は次の瞬間、黙って成海の両手を握り、深くお辞儀をしてきた。一瞬困惑した成海であつたが、武田のその行為は、祖父に向けられた、敬意であつた事を知る。
「サードアイ輪道は、私達のヒーローなんだ。彼に憧れて、オフロードバイクを始めた。

まさか貴女が、その血筋の方であつたとは……
どうか、お爺様によろしくお伝え下さい」
なおも最敬礼をする武田。
全力を出し切り、本気で闘い、勝敗が決した後にあつても、お互いを称えあえる相手に
出合い、成海は感動を覚えていた。そして、
バイクで走る楽しさまで、再確認させられ……
それに、ずっと仏頂面をしていた坂本も『3
位なんてビリと同じだけどよお、最後の『Sは
……あの武田さんを抜いちまうなんてな。凄
く良かったよ』などと、少し照れながら、成
海に賞賛の言葉を贈つた。
あの事件以来、ずっと孤独だった成海。そ
れは、冷たく閉ざしてしまつた心に、少しだ
け、温かい光が差し込んだ瞬間でもあつた。

夕刻、表彰式も無事に終わり、帰り支度を
 していた時だった。
 「おう、喉乾いたろ？なんか飲み物買って
 きてやるよ」
 坂本が珍しく気を利かせ、成海にそんな事
 を言った。
 「うん。頼むッスよ」
 岩野が、小走りに駆けていく坂本の背中に
 そう言葉を投げかける。
 「成海ちゃん、坂本を許して欲しいッス。
 あいつは心底、下村さんに惚れ込んでたんす
 よ。だから行き場のない悲しみを、成海ちゃ
 んに向けてしまったんす。どうか許して欲し
 いッス」
 愁いの表情の成海。
 「許すもなにも：もう充分わかってるよ。
 アイツ、本当は優しいヤツなんだよね」

そんな成海に、岩野は何度も頷いてみせた
 その時だった。少し離れた場所で、タイヤの
 スキール音が激しく鳴り、次には女の悲鳴が
 聞こえてきた。
 顔を見合わせる成海と岩野。嫌な予感がし
 た。全力で走り出し、その場の人だかりの中
 へ割って入る。そこで見たものは、頭部から
 血を流し、無残にも倒れている坂本の姿だっ
 た。
 「坂本おー」
 「坂本おー」
 岩野が叫びながら駆け寄った。
 「一体何があったんスカ」
 するとギャラリ一の一人が答える。
 「いや、急にあのクルマが走ってきたかと
 思ったら、その人を撥ね飛ばして」
 その男の指さす方向には、坂本を撥ねたと
 思われる古いセダンが一台停まっていたのだ
 が、運転手の姿は既に消えていた。
 「チクショーー」まさかこんなタイミングで

襲われるなんて」

周囲を見渡す成海。

「チクショー、チクショー」

注意深く、全神経を張り巡らせる。更に注

意深く、注意深く。そして野次馬の向こう側に、一台のバイク

を見つけた。

「あっ」

そこで見たそのバイク。そいつは聞き覚え

のある、空冷4サイクル・モンスター、

KERKER KR 管の野太いエキゾーストノートを響

き渡らせた。

「：Z1000MK2：」

成海の眼が大きく見開かれた。

そのバイクに跨った人物は、フルフェイス

のヘルメットを被っていたが、すぐに誰だか

分かった。瞬間、その男は右手で“来い”と

いうジェスチャーをしてみせた。

「上場見い」

成海の心が、どんだんだん黒く変色してい

った。

「岩野さん、アタシはアイツを追うから、

坂本さんをお願いー」

そう言うや否や、一直線に走り出す成海。

が、上場見は、激しくタイヤスモークを吐き

出しながら、その場から走り去る。

「チクショール」

次は成海の番だ。スクランブルインターセ

プト。サードアイに跨ると同時に、キック一

発でエンジンに火を入れ、一瞬でその場から

離陸するかのうちに、KX500を発進させた。

天井の梁にぶら下がり、見事な肉体美の上半
はランタンが置かれており、一人の人物が、
陽が落ちかけ、薄暗くなつた室内。そこに
後に3回と分けて叩き、室内に入つていった
ドアに、合図のノックを、最初に2回、その
目的と思われる山小屋に辿り着くと、入口の
進藤は随分と急いだ様子であつた。彼は、
うだつた。
まるで、おとぎ話に出てくる魔女の棲家のよ
遺産である。静寂に包まれた廃屋達。それは
も使われている様子はなく、既に忘れられた
の他にも数軒その存在が確認できるが、どれ
れた、 30 m^2 程の小さな住宅の一つである。そ
その昔バブル期に、別荘として建て売りさ
る。そんな場所に進藤の姿があつた。
隣に立ち並ぶ、ログハウスの山小屋群であ
同時刻。旭川市の某所。そこはスキー場近

身を露わに、何度も懸垂を行っていた。しかし
し明かりは“ぼんやり”としていて、はつき
りと顔が見てとれない。
それから進藤は、その人物のトレーニング
の邪魔にならないよう、ゆつくりと話しかけ
た。
「遂に上場見が動き出した。それに睨んで
いた通り、バックには相当なヤツが絡んでい
そうだ」
その人物は、進藤の言葉を聞きながら、更
に数回懸垂を続け、ある一定回数に達したと
き、ようやく梁から手を離し、床に飛び降り
た。少し呼吸が荒い。
「そうか：他の連中は？」
その男の声、それは低音ながら、澄んでよ
く響く声だった。
「坂本が車で撥ねられた：まさかあの場
で、そこまでするとは：甘かった：」
進藤は悔しそうに下唇を噛む。
「成海は？」

「成海ちゃんは……。いま彼女は、上場見と
思われる人物を、バイクで追っている。それ
に、俺の方から所轄署にも通報を入れたから
警官隊も総出動し、あちこちで検問を張って
いる。確保は時間の問題だと思うが……」
一瞬言葉に詰まった。
「いや、これは俺の勘だが……。それだけじ
や終わらない気がする。まだ上の許可は下り
ていないが、いますぐ一緒に来て欲しい」
暗がりでも、薄ぼんやりとした顔は見えない
が、その人物が“ニヤリ”と笑ったのがわか
った。

9

2台のモンスターマシンによる追跡劇。成
海は遂に、上場見を追い詰めた。追っている
そのバイク、それは下村のZ1000MK2だ。他の人
間が、易々と乗りこなせる代物なんかじゃな

い。暴れる車体を押さえつける強靱な下半身と、卓越したバランス感覚、更には、指先に繊細なアクセルワークを要求してくる『空冷モンスター』なのだ。同じ“時代遅れの化物”を飼い馴らす成海には、よく分かっていた事実、アクセルを開けるたびに、あらゆる場所、派手なテールスライドを誘発し、立ち上がりでは、いたるところで、ポンポンとフロントタイヤを浮き上がらせる。その溢れ出すパワーとトルクは、速いどころか、逆に『乗り難さ』という足枷が、容赦なく乗り手に襲いかかってくるのだ。

それでも上場見は、そんなバイクを辛うじて操作しながら、旭川市街で派手なカーチェイスを繰り広げ、郊外の山麓、ある解体屋の工場に逃げ込んだ。

ヘルメットを脱いだ成海は、一つ大きく深
 呼吸をした。
 そのプレハブ造の工場の裏は、大きな山が
 そびえ立ち、樹木が生い茂る。さらに周囲は
 廃車が壁さながらとなり、迷路のようになっ
 ていた。もう逃げ場はどこにも無い。
 「上場見：」
 成海の全身が総毛立つ。ゆっくりとした動
 きで下車し、工場の内部に歩み入った。
 工場内は、吹き抜け構造2階建てで、広々
 としている。少々薄暗く、機械を扱う工場独
 特の、鉄と油の“つんつ”とした匂いが鼻に
 ついた。しかしそれは、子供の頃から慣れ親
 しんだ匂いでもある、少しだけ、成海の心を
 落ち着かせる。
 そこから『ひゅううっ：』つと、空手の
 “伊吹”を一息吐き、五感を研ぎ澄ませ、こ

れからの戦いに備えた時だった。薄暗い工場内の更に一層闇の深い場所から、人の気配を感じた。そしてそれは、不気味な空気を身にまとい、音もなく“ぬらり”と現れた。その姿……。成海は少々“ぎよっ”としたが、すぐに平静を取り戻す。そこにいたのは、ミイラ男さながら、顔の全面に、包帯を巻きつけた男だった。そして、その口から発せられる、不快な波調の声だけは、忘れたくても忘れようがなかった。



長い舌をべロリと垂らし、下卑た笑い声が工
 場内に響く。
 『上場見』もう間違いなかった。
 全身が身震いする『どんなにこの瞬間を待
 ち望んだ事か』身体にアドレナリンが湧き
 出し、力が溢れ出てきた。
 「会いたかったよ……。上場見」
 「ひっひっひっ。お嬢ちゃんよお、そんなに
 俺の事が恋しかったのかい？俺もなあ、お前
 を忘れた日なんて無かったぜえ、この碎かれ
 た顔が、疼いて疼いてよお。ひっひっひっひ
 ー
 「ああ。アタシも、アンタが恋しくて恋し
 くてねえ、一刻も早く……止めを刺してやりた
 かったのさ。」
 そう言うや否や、成海は一気に走り出し、
 その勢いで“ふわり”と宙に舞い、飛び蹴り
 を見舞った。しかし、それを軽くかわした上
 場見は、後ろ手に隠し持っていた鉄パイプで、

成海の頭部へ一撃を飛ばす。が、成海は何の
 躊躇いもなく、右腕でブロックし、その一撃
 を弾き飛ばしてしまった。
 鈍い音。そんな音と共に、上場見は鉄パイ
 プを持っていた手に、痺れに似た感触を感じ
 ていた。
 「ああ、くん？プロテクターか？小癪なヤ
 ツめ」
 「ハンター同じ轍は踏まないよ」
 なんと、M65ファイールドジャケットの袖に下
 には、KADOYA製の丈夫なアームプロテクター
 が、しっかりと装着されていたのだ。
 「ひーっひっひ、好きだぜえ、成海い
 う」
 そんな上場見の、興奮した声が響いた時、
 表でパトカー複数台の電子サイレン音が、け
 たたましく聞こえてきた。
 「ああ、くん、なんだあ、はったくよう。人
 の楽しみを邪魔しやがって」
 なんと、ガツカリした様子の上場見だっ

たが。 「おい、やれ」

左手を軽く掲げ、誰かに合図をしたとたん、突然工場のシャッターが、勢いよく下ろされ、太い門が掛けられた。そして、どこからともなく、潜んでいた3人の手下達が現れ、吹き抜け構造の2階へ向け、むき出しの鉄階段を駆け昇り、そこに用意してあった、大量の火炎ビンに火を点け、2階窓から、表に積み上げられていた廃車に向け、次々と投げつけた。火炎ビンの中身は、揮発性の高いガソリンだった。辺りはあつという間に、火の海となり、爆発的に燃え広がった。

「ひーっひっひー。どうだ成海い、綺麗だろおはこれ邪魔するヤツは、一人もいないぜえくー」

「：アンタは狂ってるよ：」

「ひーっひっひー」

そのとき外で、ひと際大きな爆発が起こった。

手下の一人が階段を降りてきて、上場見の
近くに佇んだ。
「ひっひっ、ガンセキィ、お前もお嬢ち
やんと遊びたいのかあ。いいぜえ、たあ
っぷりと可愛がつてやんなあ、弱ったところ
で、俺がなぶり殺しにすつからよおう」
そのガンセキと呼ばれた男は、見た目通り
分厚い筋肉に覆われた体躯を持ち、首にいた
つては、その長さが分からないほどに太く、
肩も巨大な筋肉で大きく盛り上がっていた。
無言で“コクリ”と頷く。
「ガンセキはよお、しゃべれ無えんだ、だ
からコイツの想いをよお、身体で受けてやつ
てくれよ成海い、ひーっひっひー」
上場見がそう言うや否や、ガンセキは成海
めがけ、凄いい勢いで肩から突進した。でかい
割に、素早い動きをしていた。が、成海はそ

れ以上のスピードで避ける。
体捌きで相手の右側面に“ひよい”交わし
肝臓めがけて、右前蹴りを入れようとしたの
だが、上場見がすぐ近くに踏み込んできて、
鉄パイプを振り降ろしてきた。
「しゃああー」
またしても、それを腕で受ける成海。
「ハン、そういうことか」
そこから2人の波状攻撃が始まる。右に左
に2人が入れ替わり、絶え間なく成海を強襲
する。
上場見の鉄パイプが振り下ろされ、それを
捌く、ないし腕で受けると、次は死角となる
場所から、ガンセキの大振りな拳か、体当た
りが飛んでくる。
大半は交わすことができたが、少しずつ攻
撃も貰っていた。しかし、そんな状況にあり
ながらも、成海は驚くほど冷静だった。それ
は“ある覚悟”を決めていたから他ならなか
った。

やがて“その機会”は訪れた。2人の呼吸が乱れはじめ、攻撃の手が緩んだ瞬間を逃さなかつた。ガンセキの大振りな右拳をわざと受け、その勢いを利用して鋭く回転。そこから体重をのせた、中段の後ろ回し蹴りを、腹部に叩きこむ。雪山で鍛え上げられた、成海の重たい蹴脚は、ごついガンセキの体軀を“くの字”に折り、さっきまでの激しい動きを瞬時に止めてしまった。それだけ強烈な一撃だった。

もんどりをうつガンセキ。それから上場見の鉄パイプも捌き、懐近くまで一気に踏み込んだ。そこは超ショートレンジの間合い、指を軽く曲げ、虎指という右掌底をつくり、その一番硬い手根骨で、鼻を下から押し上げるように、人体の急所“人中”を打つ、最大の禁じ手『虎殺拳』による打撃だった。

鼻骨、涙骨、蝶形骨、上顎骨、下鼻甲介、口頭骨の顔面頭蓋を破壊して、呼吸器系を潰してしまい、相手を絶命たらしめる、禁断の

技だ。極限まで捻じられた体幹が、足、膝、腰、背中、肩の順で瞬時に開放され、螺旋の爆発的な力となり、掌が射出される。――殺（と）ったー」

最高のタイミングだった。それが成海の覚悟に殺人をもうとわない、覚悟の一撃。鍛えに鍛えた蹴脚は、強い打撃を生み出す。そしてこの技を、確実に極めるための土台だったのだ。

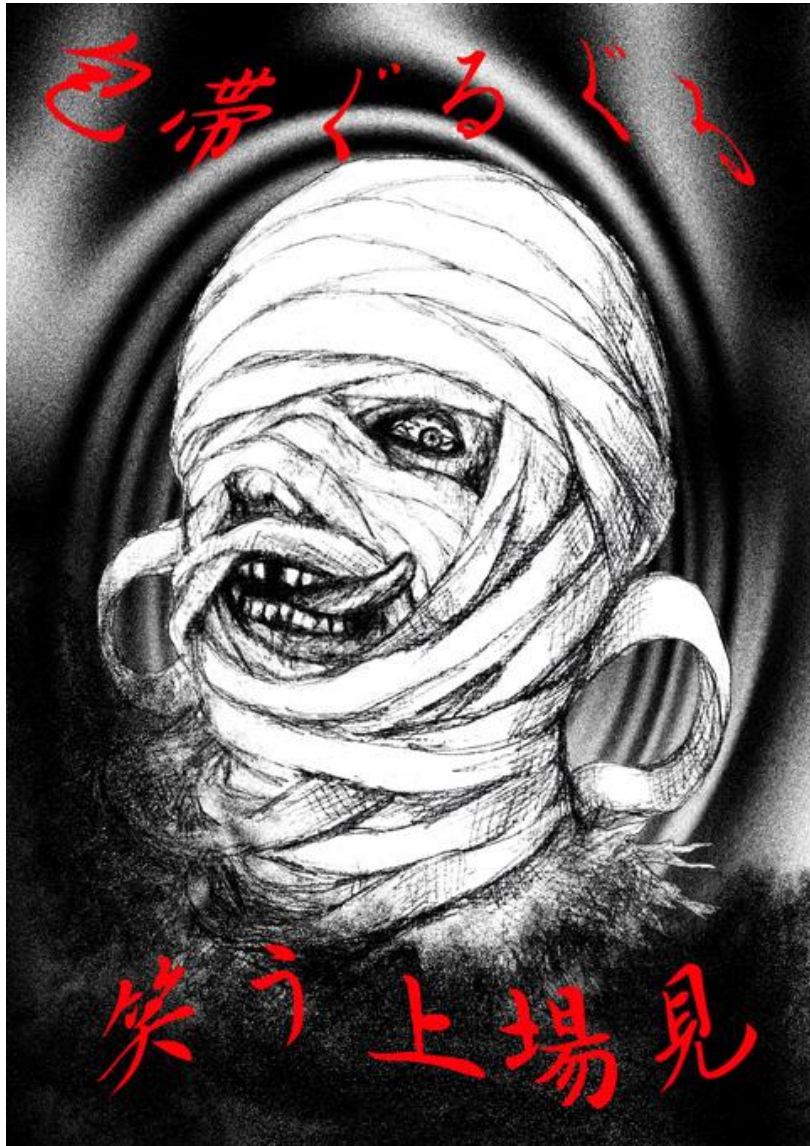
だが甘かった、次の瞬間だった。成海の爪先から脳天まで、強烈な衝撃が突き抜けた。更にその後には、肉の焦げる匂いが、鼻腔をついた。それは電圧を上げた、改造スタンガンの電撃だった。ガンセキが成海の首筋に押し当てていたのだ。

「チクショ―、あと…あと少し…」

倒れながら上場見を睨んだ。

「ひ―ひ―ひ―ひ―」

上場見は間髪を入れず、倒れた成海の膝に、



鉄パイプを叩きつけた。

「ああっ」

激痛が走る『くっ…し、しまった…』膝

を砕かれた。

「ひひひ、惜しかったなあ。でもそろそろ

お別れだ。楽しい時間は、あっという間だな

あ、成海よお」

それから上場見は、鉄パイプをゆっくりと

頭上に掲げた。

その頃、工場の外では、警官隊がごった返し、大混乱を招いていた。

「消防隊はまだなのか――」

「早く火を消せ――」

「そっちにも引火するぞ――」

「駄目だ――全然近寄れない――」

もはや烏合の衆であつた。

そうして、そのタイミングで現れたのは、

進藤と謎の人物だった。

「おい、進藤、さつき話した“アレ”をや

るぞ――早く用意しろ――」

「な、お前はバカか？ そんな事できる訳な

いだろ――」

「あん？ バカはお前だ――成海に何かあつて

からじゃ遅えんだよ――」

その言葉を聞き、少し考えた進藤は、意を

決し「よし」と短く答えた。

それからその2人は、一端その場を後にし

たかと思いきや、今度はY33セドリックの覆面

パトカーに乗り、勢いよく突進してきた。

そう、乗っているのは一人は冷や汗を流しな

がら、運転席に座る進藤。そして、なんと、

もう一人の姿は、クルマのルーフ上にあり、

まるでサーフィンでもするかのような格好を

して、目的地の工場を睨み付けていた。

「よおーしーこのまま廃車の山に突っ

込め進藤」

「くそつたれー！こんな事をして、俺は

何枚始末書を書けばいいんだあ」

燃え盛る廃車の山に迫る。

「恨むぞ、下村あー！ー！」

下村

そうなのだ、クルマのルーフ上に居たのは

死んだはずの下村だった。仮に他のSANTANAが

その場に居合わせたのなら、間違いなく目を
疑う瞬間だったであろう。だがしかし、それ
は紛れもなく彼の姿だった。
そうして、Y33セドリックはアクセル全開の
まま、炎に包まれた、廃車の山に突っ込んだ
けたたましい衝突の衝撃。その勢いで、ルー
フ上の下村は勢いよく、宙へ弾き飛ばされる
その様子を見ていて慌てたのは、工場内2
階の窓で、見張りに立っていた、上場見の手
下であった。
「うわー！ー！こっちに真っ直ぐ来るぞー
！ー！」
「だらあああー！ー！」
下村の気合いと共に、2階窓ガラスが激し
く砕け散り、吹き抜け構造の工場内へ、3人
の男達が落ちてきた。
上場見は、成海に止めを差すべく、鉄パイ
プを頭上に掲げていたのだが、突然の出来事
に驚き、その機会を逸してしまった。
土煙が舞う工場内、そこから一つの人影が

“ ゆらり ” と立ち上がり、ゆつくりと歩を進めて来た。

そして、包帯だらけの顔にも関わらず、驚きを隠し切れなくなつた、上場見が呟いた。

「 し：下村あ： 」

電撃により、意識が混濁する成海であつたが、その名前ははつきりと聞こえた。

「 え？ えっ？：下村：さん：なの？ 」

「 死んだはずの手前えが、なんでここにいるんだあーー 」

動揺を隠し切れない上場見。

「 テメエは確かに：、この俺がブチ殺したはずなのに 」

“ ニヤリ ” と笑う下村。

「 はっ、ケリをつけようぜ、上場見 」

「 まさかほまさかほまさか 」

上場見は、完全にパニックに陥つた。

そんな様子に下村は『ふう』と一つ溜息をつき、今度は成海に言葉を投げかけた。

「 成海：すまんかったな。けど、もう大丈夫

夫だー
色黒で顎髭を蓄え、武骨で野生に満ちた鋭
い眼付きだが、成海を見つめるその瞳は、と
ても温かく穏やかだった。
「ほんとに、ほんとに、下村さんなの？」
成海の瞳から涙が溢れる。
しなやかで力強く、細く引き締まったその
体躯。間違はなく下村であつた。
それから下村は、再度、上場見に向きを変
え、ある問いを投げかけた。
「これは一体、誰の差し金なんだ？」
「ひっひっひ、下村あゝ：」
上場見が吠える。
「このバケモンがぁー」
突然手に持っていた鉄パイプを、下村めが
け投げつけたが、下村は一切動じることなく
回転しながら飛んでくる鉄パイプを、左腕で
無造作に払い除けた。
その瞬間、視角となつた右側後方から、サ
イのようなガンセキのシヨルダーアタックが

突如襲ってきた。が、それに気付いた下村は
 左足に踏ん張りを利かせ、右手だけでその突
 進を止めたや否や、万力のような握力で、岩
 石の肩を握り潰してしまふ。
 「●×△※∴」うめき声と共に、苦悶の表
 情を見せるガンセキ。
 「だらああああー」
 下村は、周囲の空気が震えるほどの気合い
 と共に、強烈な左フックを顔面に飛ばす。そ
 の左拳が、相手の頬にクリンヒットした瞬
 間、ガンセキはその場で宙を半回転し、頭か
 ら地面に叩きつけられた。
 恐ろしいまでの威圧感を放つ下村。上場見
 を睨み付けながら歩み寄り、次の一撃に移行
 しようとした時、いきなり足元で、火炎瓶が
 狂おしく爆ぜた。
 本能的に宙へ飛び、爆炎を交わす。着地と
 同時に地面を転がり、攻撃態勢をとろうとし
 たが、火炎瓶が次々と放たれ、そのうちに、
 辺り一面が火の海と化した。

それは、先ほど下村と共に、2階から落ち
てきた、2人の手下の仕業だった。
「ひーっひっひー。下村あーっ」
もはや近付けないほど、大きくなった炎の
向こう側から、上場見の笑い声が響いた。
「一つ教えてやる。お前はなあ、とんでも
ねえお人から、恨みを買ってんだ。お前が生
きていたと知った以上、これから酷えことに
なるぜえ。一大人しく死んでた方が良かった
かなあ。まったく、同情するぜえ、ひー
っひっひっひー」
そして上場見は、あらかじめ用意していた
であろう、逃走用の出口から、手下と共に脱
出していった。その遠ざかっていく、単気筒
エンジンの音は、炎の中に残り残された下村
を、まるであざ笑うかのようだった。
『くそったれ。ダメか。』心の中で悪態を
つく下村。追いかけるようにも炎の壁が邪魔し
追跡は断念せざるを得なかった。しかも、最
後の出口とされる、その場所にまで、ご丁

寧にも火が放たれていた。
だが、たとえ追跡が可能であつたとしても
下村は決して上場見を追わなかつたであらう。
いま最優先すべき事は“成海”だ。下村はい
つも、仲間ことを最優先に考える。
「成海は」
下村は、倒れている彼女の元へ駆け寄り、
小さなその身体を“ひよい”と抱え上げた。
「成海しっかりしろー俺達も脱出するぞ」
「
しかし、辺りは一面が火の海となつており
壁の炎にいたつては、今にも天井に達しよう
としていた。その熱気はジリジリと肌を焼き
酸素が奪われ、息苦しさで目眩を起こすほど
だつた。
「ごほっごほっ：どうやって：：もう無理
だよ：」
むせ返りながら、成海が弱々しく答える。
「大丈夫だ。今度は俺がお前を護る」
そう言い、まだ、炎に包まれていなかった

、

、

。

Z1000Mk2 に成海を乗せた。

それから下村は“ぎり”と眼つきを鋭く

周囲を見渡し、目標を捕捉する。それは工場

正面のシャッターに掛けられていた門。

「っしやあーっしー」

自分に気合いを入れ、一気に走り出し加速

それは弾丸のような勢いで、捕捉目標に迫り、

そこから全力のサイドキックを放つ。

「だらあああああーっしー」

その門は、柱等に使用される120mm角の部材

であるにも関わらず、一発目のサイドキック

で亀裂が入り、追いつ打ちの二発目には、乾い

た音を立て、見事に押し折れてしまった。そ

れから下村もZ1000Mk2に跨る。

「成海行くぞ、しっかり捕まってる」

「：はい」

成海は下村の逞しい背中を、ただただ強く

抱き締めた。

「いっくぜえーっしー」

その空冷モンスターは、やっと帰ってきた

主の想いに呼応し、いつもより激しいエキゾ
ーストノートを奏で、今にも焼け落ちそうに
なっていた、工場のシャッターに向かい、鋭
く突進していった。



成海の怪我は、膝蓋骨粉碎骨折。いわゆる
 膝の皿が、砕けてしまっていた。
 焼け落ちる工場から、見事な脱出劇をみせ
 た下村は、そのまま、高度医療機関へ成海を
 運び、緊急手術を受けさせた。それは何時間
 にも及ぶ、大手術であつた。
 しかし、実はこのとき、医者は一生命に危
 険が及ばない外傷である。一との判断から、手
 術日を後日に回そうとしていたのだが、それ
 に怒つた下村は、かなり強い説得を敢行。
 何を言われても、絶対に引かない下村に対し
 遂には医者側が折れ、緊急手術となつたのだ
 ぞれから、その砕けた骨は、見事元通りに
 復元される。しかも「リハビリ次第で元通り
 動くようになる」太鼓判まで貰い、わが
 ままを聞き入れてくれた、整形外科のドクタ
 ーには、本当に感謝した。

手術後、成海の全治は、リハビリも含め3ヶ月。そんな診断が下され、当分は病院のベッドで、大人しくすることとなった。

14

そんなある日、成海の病室には、SANTANAのメンバーである、下村、進藤、岩野、坂本が見舞いに來ていた。坂本に至っては、クルマで撥ねられたにも関わらず、足、腰の打撲、額の裂傷程度の軽傷で済んでしまい「下村さんに負けず劣らずのタフボディだぜー」としきりに自慢をしていた。それからほどなくして、待ち合わせをしていた、成海の祖父・源三と妹の七菜香が到着した時に、ようやく進藤の口から、今回の件について、詳しい事情が語られた。

「道警の調べでは、上場見の逃走劇の裏に

は、とんでもないヤツがその背後に潜んでい
る事を掴んではいたのだが、その実態がいま
いちはずきりとしなかった事から、下村の安
全を確保することを第一に、ひとまず死んだ
事にして、犯人達を泳がせたんだ」
淡々とした進藤の語り口が、悲痛な響きに
変わる。
「すると、上場見の一味と思われる輩が、
SANTANAのメンバーに、あらゆる危害を加えて
きたため、そのまま捜査を、続行する事にな
ったのだが、成海ちゃんを含め、他のメンバ
ーに、とんでもない苦しみと、悲しみを与え
る結果となってしまうた……。ほんとうに申し
訳ない」
進藤は深々と頭を下げ、心から皆に謝罪し
た。だが、そんな進藤の『他のメンバーや成
海に、真実を伝えられない』という、やり切
れない後ろめたさや、長きに渡る心労を考え
ると、誰も文句を言う者はいなかった。
今度は悔しそうな表情を見せる進藤。

「そして、ようやく姿を現した上場見が、
下村に向け『とんでもねえお人から恨みを買
つている』との捨て台詞を吐いた事から、や
はり、背後に何者かがいて、ほう助している
事が明らかとなったのだが、あと一步のここ
ろで、実態は掴めず終いであつたうえ、取り
逃がす結果となつてしまつた」
一度唇を固く結び、再度ゆっくりと話し出
す。
「あの燃え盛る工場。その裏口から逃げた
上場見は、あらかじめ用意していたCRF450Rに
跨り、切り立った裏山に逃走したのだ。もう
その時点で、警察には追跡する術が無かつた
：」
肩を落とす進藤。
「ここまで追い詰めたのに、一人も逮捕す
る事が出来ず、非常に残念だ：」
最後にそう締めくくつた時だつた。
「その恨まれている俺が、こうしてピンピ
ンしてんだ、そのうちまた、ちよつかい出し

て来んだろ」
などと、下村が事なし気にそう言い放ち“
ニッコリ”と笑って見せた。
一瞬、全員啞然としてしまったが、すぐに
安堵に変わる。自分が殺されるかもしれない
状況下で、サラリとそんな台詞を吐き、笑っ
て見せたのだ。なんだか、そんな下村がとて
も眩しく、また頼もしく思えた。
「それにしてもアイツ：、上場見は：、な
んでMISを捨てたり、潰したりもしないで、し
かも整備までした状態で、あの場に乗って現
れたんだろ？」
坂本が、ずっと気にしていた疑問をポロリ
と漏らす。
「そんなの、深く考えるまでも無えよ。結
局アイツも、バイクが好きなんだよ。まあ、
成海を誘い出すつてのも、あつたかもしれん
がな。うん。バイクは良い腕してんのにな：
どこで、あんなんなつまんだろうな」
下村が少し寂しそうに答える。それから、

続けて成海も疑問を投げかけた。
「でも下村さん、お腹を刺されて、ナイフ
が身体を貫通したのに、どうして大丈夫だったの？」
当然、皆も興味を示す。
「はっはっは、コレな」
Tシャツをめくり、バキバキに割れた、
パックの腹筋に残る傷跡を見せた。
「こんだけ大っきい傷なんだけどよお、内臓
は一つも傷ついてなかったんだ。複雑に入り
組んでいる腸を全て交わして、ナイフが背中
に突き抜けただけでよ、結果的に腹と、背中
の表面を、ちょこちょこつと、縫っただけで
済んだんだよ。で、その日のうちに退院だ（
笑）
これまたサラリと、とんでもない事を言い
放った。
「な、こいつバカだろ。医者も最初は、奇
跡だーなんて言ってたけど、こんな調子なも
んだから、終いには呆れるのを通り越して、

笑いながら腹を縫ってたんだぞ。部分麻酔じ
 やなく、全身麻酔にして貰えばよかったんだ
 ほんつとにバカだなお前は
 進藤が呆れて言った。
 「てめえ、人のことをバカバカバカバカ。
 いい加減うるせーんだよ。」
 「なんだとバカーバカにバカと言って何が
 悪い？って、あっコラ。」
 そこで、下村と進藤の、取っ組み合いのケ
 ンカが始まった。しかし、本気で殴り合った
 りはしていない、どこかじゃれ合っているよ
 うなケンカだ。
 「もう、病人の前で、何やってるツスカ
 2人とも？ほんつとにバカっすね。」
 岩野が口を挟んだ瞬間だった。
 「なあ、くにい、く、は。」
 下村と進藤が口を揃えて、今度は岩野に飛
 びかかった。
 「ああ、一なにやってるツスカ？バカっす
 よ。」

進藤は、暴れる岩野を押さえつけ、そこに
下村が、岩野の両頬をつねり上げて、顔を大
きく横に引き伸ばした。
「バカっすよーバカっすよー」
岩野の些細な抵抗であつた。
そんな様子を見ていた成海が、急に「ぷっ
ー」と、小さく吹き出した後「あははははは」
大きな声で笑い出した。
「なんなのもう、なんて人達なの？ あは
ははははは」
それは、ずっと冷たく閉ざされていた、成
海の心が氷解し“憎しみのウロボロス”から
解き放たれた瞬間だつた。
「ナルちゃんか笑つた」
それを見た七菜香は涙を流し、源三の腕に
抱きついた。
そして下村は、何度も頷きながら、優しい
眼差しで、成海を見つめていた。が、両手の
力は緩めないどころか、更に力を込めて、岩
野の顔を、横に大きく広げた。

「あががが、アーリーカー、アーリーカー」
もう岩野は、まともに喋れなかった。

「あはははははは」

尚も愉快そうに笑う成海。また以前のように

に、向日葵のような笑顔が咲きほこった。

その場にいた、全員が同じ気持ちだった。

下村という太陽に照らされ、皆が元気になり、

希望の灯が点されたのだと。

GREAT DAYS。それは『審判の日』などではな

く、成海と SANTANA を繋ぐ線（line）を取り戻し

た（Recovery）した『最高の日』となった。

その時、病室の窓の外から、夏の始まりを

告げる、セミの声が聞こえてきた。

あ　と　が　き　の　よ　う　な　も　の

さ　て　、　第　二　章　は　如　何　だ　っ　た　で　し　ょ　う　か　？　途

中　、　暗　い　ス　ト　ー　リ　ー　展　開　と　な　り　、　気　持　ち　が　沈

ん　じ　や　っ　た　よ　お　ー　。　な　ん　て　方　が　い　ら　っ　し　や

い　ま　し　た　ら　ご　め　ん　な　さ　い　。　し　か　し　、　終　盤　は　下

村　が　再　登　場　し　、　ぱ　っ　と　華　が　咲　く　よ　う　に　、　清　々

し　く　締　め　く　く　れ　た　の　で　は　な　ど　と　、　当　方　は　そ

う　感　じ　て　お　り　ま　す　。

あ　っ　ー　そ　う　そ　う　に　実　は　で　す　ね　、　こ　の　第　二　章

に　は　裏　設　定　と　申　し　ま　し　よ　う　か　、　も　う　一　つ　の　物

語　、　パ　ラ　レ　ル　ス　ト　ー　リ　ー　が　存　在　し　ま　す　。　そ　れ

は　、　下　村　が　本　当　に　死　ん　で　し　ま　う　設　定　が　当　初　あ

っ　た　の　で　す　。

折　角　で　す　の　で　、　こ　こ　で　そ　の　ス　ト　ー　リ　ー　を　少

々　ご　紹　介　さ　せ　て　頂　き　ま　す　。

成　海　が　ひ　と　冬　の　修　行　を　終　え　、　源　三　と　ペ　ン　シ

ョ　ン　内　で　会　話　し　た　後　の　、　な　が　く　い　中　編　の　内

容　と　な　り　ま　す　。　あ　の　あ　と　成　海　は　、　一　人　で　色　々

な　オ　フ　ロ　ー　ド　の　レ　ー　ス　に　出　場　し　ま　す　。　勿　論　そ

れは上場見をおびき寄せる作戦であります。
案の定、上場見一味が喰らい付いてきます。
で、そんな輩をとことん排除してゆく成海な
のですが、それと同時に彼女の心はどんどん
荒んでもいきます。しかしながら、嬉しいこ
ともはその様々なレースを通して、凄いい
ツクを持つセロー乗りの少年と出会います。
その少年は、心が荒んで来て怖ろしい雰囲気
を醸し出す成海に、一つも物おじすることな
く懐いてきます。当初、少々困惑するものの
そんな彼を仲間として受け入る事になり、年
が同じだった七菜香と付き合い出す事にもな
り、遂には妹のご懐妊騒動へ（笑）
この時点で、凍てついた成海の心は一度氷
解しかけます。世間的には17歳の妹が妊娠
など、修羅場になりかねない事態なのですが
源三は息子夫婦を、成海と七菜香は両親を失
っているのです、むしろ新しく増える家族の誕
生を喜びます。
そして事件が起きます。あるレースを終え

します。満身創痍になりながらも、遂には虎
刹拳を上場見に決め、止めを刺そうとします
そう、殺人を犯そうとしてしまします。殺意
でドス黒く染まってしまった成海。そんな彼
女を救ったのは：etc。
と、まあ、こんな感じでストーリーが流れ
驚愕のエンディングへと進んでいきます。
如何ですか？読んでみたいという方がいら
っしゃいましたら、どしどしメッセーヂを下
さい。もしかしたら、このパラレルストーリ
ーを書くかもしれません（笑）

一先ず、本編は第三章の「Def busta」Legacy」
へ。勿論、主人公
は下村です。そしてこのストーリーこそが、
当方が一番書きたかった物語なのです。しか
もこの回からは、読者の皆様に、より感情移
入して頂こうと、主人公の一人称で物語を書
き進めております。乞うご期待です！
ともあれ、終盤はかなり急ぎの編集作業と

な っ て し ま い ま し た が 、 な ん と か 年 内 (2016
年) に 第 二 章 を 書 き 終 え 、 す つ き り し た 気 持
ち で 、 新 年 か ら は 第 三 章 を お 届 け で き ま す 。
ど う か 今 後 も お 付 き 合 い を お 願 い い た し ま す
そ れ で は 良 い お 年 を 。

2016.12 吉 日

む ら っ ち 2